戦後アメリカ学界の清代史研究動向

大谷敏夫

戦後アメリカの学界にあって近代史研究に於ては何といってもJ・Kフェアバンクの研究が一つの柱となっていたといえるが、今日にあってはフェアバンクの研究をのりこえる成果が続々公表されており研究は深化し多様化してきているのが現状である。私自身戦後研究の道を歩む中でフェアバンクの研究を始めとした欧米の中国研究に関心をもっていたが、戦後の一時期アメリカの中国研究を余り評価しない傾向もあり、それに影響されていたのは事実である。しかし一九八〇年代に入って米中間、日中間の国交回復後の相互交流が盛んになるにつれ、それが学界の研究状況にも反映して研究者の相互訪問、国際的な学会の設立なども進行し、情報機構の急速度な発展とあいまって現在では研究の規模が一層グローバル化しているといえる。ところで表題を中国近代史研究とせずに清代史研究としたのは私の目下の関心が清代史にあることにもよるが、アヘン戦争以後を中国近代史とする研究に対して種々の問題点が指摘されてきたことにもよっている。これに対する私の見解は拙著[1]でのべているのでここでは省略するが、ただ所謂中国近代における改革を外因論でみるかそれとも内因論でみるかが論点の分れ目になっている点だけを指摘しておきたい。

ところで戦後の中国近代史研究の視点を総括した著作として一九八〇年代の初めに公刊されたP・A・コーエンの『知の帝国主義』がある。[2] この著でコーエンはアヘン戦争を西洋の衝撃とし、その反応が中国近代化の過程として把握したフェアバンクの視点に対して疑義を呈し、それは外因論重視で内発的要因を軽視する見解であると批判した。コーエンが当時注目されていたウォーラースティンの「世界システム論」も取りあげ自説を立証した点については、井上裕正氏の研究があり、これらのことについては拙著でまとめておいたので参照してほしい。[3] 但、ここではウォーラースティンやコーエンの提起した課題によって従来のアヘン戦争を近代史の開始とする説が再検討を迫られたことに注目したい。それと共に筆者

は中国史の展開を内発重視でみる視点には基本的に賛同しつつも外圧の問題も軽視してはならないとも考えている。このように考えるのはフェアバンクの研究に当初接した時、フェアバンクが中国がアヘン戦争の敗北後長年に亘るその伝統的な中華主義的外交を修正して国際法に基づく条約体制に移行せざるを得なかったと論じていたことに強烈な印象を受けたことによっている。一九六〇年代後半研究者としての道を歩み始めた時、筆者はアヘン戦争に関心を有しイギリスの侵略に断固抵抗しつつもイギリスが中国よりも軍事及び産業技術に秀でていることを率直に認めそれを学ぶことを主張していた経世官僚林則徐とその幕友魏源や包世臣に注目して論文を書いたが、[4] その中でアヘン戦争について論じている内外の研究に目を通した。フェアバンクについては坂野正高氏による一連の研究があることを知りそれらを取り寄せて検討した。坂野氏は一九五四年にフェアバンクの論文「中国沿岸における貿易と外交」を取りあげ、この著は「西洋からの衝撃に対する中国社会の反応及びこれによる変易の過程の一様相を英華関係を主軸として推移する初期条約港社会の分析を通じて解明しようとするものである」とのべ、結論として「条約体制や洋関が中国の伝統の文脈の中でどのような意味をもったかを問うことは重要である。併しこの問いに答えるには十九世紀後半の政治過程をその動態において分析することが必要であろう」という。[5] 坂野氏はこの指摘に基いて一九七〇年に大著『近代中国外交史研究』を公刊されたが、[6] 政治過程の展開が見事に結実された好著となっている。フェアバンクの回想録[7]によるとこれより先坂野氏は一九五二年から五三年にかけて来日していたフェアバンクと知り合い、日本における近代中国研究目録を作成し、これが契機となって五五年にフェアバンクとの共著『近代中国に関する日本人の研究』を出版した。フェアバンクは其後一九六〇年、六四年と来日して東京・京都の研究者グループと交流したが、その一方ではフォード財団などの資金援助による近代中国研究を批判する研究者グループも存在し、研究がスムーズに進まない面もあった。こんな中で市古宙三氏は東洋文庫内に近代中国研究委員会を作り活動されていたが、一方フェアバンクの中国研究の成果として一九四八年以来改訂を重ね七〇年刊行された著作の翻訳を行ない七二年出版された。[8] この著は第一章　自然と人文、第二章　中国社会の特質、第三章　儒教の典型、第四章　外国の支配と王朝のサイクル、第五章　政治と

伝統とあるごとくここまでは旧中国の社会、文化の特性を地理、歴史からみてまとめて列挙し、第六章　西洋の衝撃としてここから現在に至る歴史上の事象特にアメリカと中国の関係に留意して詳細に叙述している。あとがきで市古氏は、この著は細かな歴史事実にあまりこだわらず今日の中国を理解する上で何か重要であるかを著者はまず考え云々とのべているが、この著はフェアバンクが中国の歴史にあっては近現代を重視しその契機となったアヘン戦争を西洋の衝撃として把握したこの外因論が本著の特色でもあったといえよう。ところで一九七一年フェアバンクのこの著が公刊された頃アメリカは六〇年代後半軍事介入したベトナム戦争の最中であった。この戦争は七三年にアメリカのベトナムからの撤退で終るが、同時に中国では六六年から七六年まで文化大革命を推進しており、これらのことが近現代史研究者フェアバンクの歴史研究に痛烈な影響を与えていた。氏はこの同時的現像だった二つの悲劇は起源において相互に無関係ではなかったと記しており、更に文革の悲劇をもってうまく救済する方法があったはずであるという。それにはアメリカもあれほどまでに独善的にかたくなにそして激しく中国革命に反対する必要はなかったこと、またアメリカが中国革命の実情を認識していたならば、そして自分たちの中の恐怖心について客観的な態度がとることができたならば、中国革命という現実にもっと柔軟な対応をすることができたであろうという。同様のことはベトナムについてもいえることであると記している。[9] 一九七二年公刊の著『中国』のあとがきで市古氏がのべているが、七二年二月　ニクソン大統領が北京を訪問する前にフェアバンクのこの著を読んで中国を学んだとのことである。[10] ここから米中関係が大きく転換することになるが、この年に本著が翻訳された意義は大なるものがあった。ところで戦後アメリカの中国史研究を検討していく中でベンジャミン・シュウォルツの著作にであった。シュウォルツはフェアバンクと同僚でありハーバード大学の歴史学部と政治学部の教授として現代中国政治と中国思想史を講ずると共に東アジア研究センターの中心メンバーであった。氏には一九五一年刊行の大著『中国共産党史』があるが、これは一九六四年に石川忠雄氏他のメンバーによって邦訳された。この同じ年、シュウォルツは別の大作をハーバード大学出版会から公刊していた。

それは中国近代化の中で生きた知識人厳復の研究であった。この著は一九七八年平野健一郎氏によって『中

国の近代化と知識人―厳復と西洋』と題して翻訳された。[11]厳復は清末の知識人で若年イギリスに留学し、そこでハーバード・スペンサー、トーマス・ハックスリー、アダム・スミス、J・S・ミル等といったイギリスの代表的な思想家の著作を研究し、帰国後清末の改革運動に思想的貢献をした人物である。シュウォルツによれば「厳復のように伝統文化をその内側から観察する人の眼をとおして眺められる時、それは相争い正反対でさえある多くの傾向からなる複合体であり、他方彼は一つの実体的な全体としての西洋に反応するのでなく、十八世紀、十九世紀の思想の複合体に含まれるある一定の要素に対して反応するのである」[12]と解釈している。

ここには中国の伝統思想とそれに対じする西欧思想とを単なる対立概念で把握するのでなく、思想と思想の衝突を通して生ずる反応を複合体という新たなる角度からみようとするものである。

フェアバンクは後年このシュウォルツの見解を彼の著作にとれいれ、[13]中国近代思想において伝統思想の中にみられる権威主義的な集団主義が欧米流の個人主義・自由主義の育成を制限する面もあるが、これらの要素を生かした集団―国家のあり方も模索する必要があると考えるのである。このシュウォルツの研究は伝統思想を体とし欧米思想を用とする清末の中体西用論を解明する一つの手がかりを示したものとなった。

次にシュウォルツ同様東アジア研究センターのメンバーであったフィリップ、キューンの著作が一九七〇年公刊され、その著作を手にした筆者は早速通読し一九七一年書評した。[14]キューンはこの著で太平天国の乱の主体となった上帝会という秘密結社の成り立ちを社会学的な手法を用いて、これを鎮圧した郷勇との対比の上で分析したものである。ここには秘密結社の発生を外圧によってもたらされたものでなく中国社会の中で生み出されたものとしてとらえ、アヘン戦争といった外圧はあくまで副次的なものとして考えるところに特色があった。また氏の研究はこれを単なる太平天国の乱にとどまらず、その後の農村を基盤として勃興してきた共産党の存在を含めて視野にいれている点興味深いものがあった。それと共にこの著を読む中でキューンの社会学的分析の手法に影響を与えたと思われるスキナーの市場圏の研究に注目した。G・W・スキナーの市場圏については、一九七六年河地重造氏が「アヘン戦争以後のウエスタン・インパクトと中国の農村経済体制」と題してその概念をとりい

れた研究[15]を行っていたが、その後斯波義信、中村哲夫氏等によってスキナー研究は一層進められ、一九七九年にはスキナーの原著『中国農村の市場・社会構造』の翻訳も行なわれた[16]。ところでこのように日本でのスキナー研究がようやく中国社会史研究者によって注目され始めた頃に、イギリスの中国社会史研究者マーク・エルヴィンによって一九七三年旧中国の社会・経済を通史として概観した著作が公刊された[17]。この著の中でスキナーの市場構造論と共に斯波義信氏の宋代商業史研究も参考にされていた。筆者はこの著の書評を一九七四年に行ったが、この著の中で多くの日本の研究が引用されている点に注目した。本著の特色は何といっても宋代中国が到達した世界で最も発展していた高度な経済構造・産業技術が十四世紀の転換点を境に量的な進歩はあっても質的な面で行きづまり高度な平衡状態を維持し続けたという見解である。この理論は結局中国社会を停滞したものとしてとらえているのではないかという疑問である。しかしそれにしてもこの技術進歩を阻む産業構造上の要因として人口と資源と生産力の関係を論じている点、この著の提起した問題は重要であり今日の中国経済を分析する上での指標となっている。

ところで本著の結論として著者は現在の中国に対して長年に亘る高度均衡の行きづまり経済をいかにして改革して経済成長をなしとげるかということに関心をもっているようであり、そのためには伝統的な農村経済に依拠して成立した中国共産党の政策の転換が必要であろうと暗示していると記したが、其後一九八〇年以降鄧小平の開放経済、市場経済の促進により共産党が伝統的な農村経済より都市経済に転換しているその後の歴史はエルヴィンの示唆通りになっておりその炯眼に感服するものがある。ところでこのエルヴィンの研究では明末清初中国には商業資本は存在していたもののそれが産業資本に転換しなかったとのべているのであるが、これに反論した研究者の一人にイェール大学教授余英時がいた。イェール大学には他にもジョナサン・スペンスのような秀れた研究者がいたが彼については後述しよう[18]。余英時は『中国近三百年学術史』の著者銭穆の弟子でありハーバードでは中国経済史家楊聯陞に学んでおり、その研究は本来の思想史、学術史に加えるに経済史更に欧米との比較思想にも関心を有し研究範囲は多岐に亘っており、その成果は一九七六年刊行の『歴史與思想』一九八七年刊行の『中国近世宗教倫理與商人精神』に収められてい

る。

彼は一九七三年「関於中国歴史特質的一些看法」（『歴史與思想』所収）にこのエルヴィンの著作を取りあげ、[19] この著が中国歴史の特質―経済史方面の特質を明らかにしたものとし、特に紀元後十四世紀を中国史の転換点として十五世紀以降中国の科学技術は停頓したこと、そしてこれを「高度平衡的陥穽」となづけた点に注目する。すなわち中国経済はこの時期高度の技術と人口資源の間に一定の平衡関係に達した後、経済発展は落とし穴の中で減少下落したというものである。これに対して氏はエルヴィンの理論は空中楼閣でありその理由として、人口問題と土地制度、賦役制度は分けられないし、人口統計もあいまいであるという。また中国に工業革命、資本主義がおこらなかった原因について近代的科学技術が発達しなかったことをあげているが、その理由として直接咎を理学の束縛としているのに対し氏はこれもおかしいと反論する。それで結論としてこれについて社会条件、経済状況から政治形態と人口に及ぶまで全面的に考慮しなければならないという。かくして余英時は其後『中国近世宗教倫理與商人精神』を叙述し、宋代以降の理学にみえる宗教倫理の中に「世俗内的禁欲」の精神を見出し、これらによってウェーバーの中国観、特に儒教観を批判した。[20] すなわち余氏によればウェーバーが西洋資本主義の企業精神をプロテスタンティズムの中にある勤労意識にみたのと同じような倫理思想が中国近世の宗教理論の中にもあるというのである。

ここに余氏は明清の理学を単なる体制教学としてみる見方、及び空理空論と批判した清末の梁啓超等の見方も含めて批判し、理学の中に科学精神を見い出そうとするのである。余氏は更に清代思想史にみられる従来の政治的解釈や経済的解釈では思想史の内在発展に著眼していないとし、儒家の致知精神である「道問学」と「尊徳性」に注目すべきであるという。

すなわち宋明理学における朱熹より王陽明に至る主流に道徳修養を以てするものがあり、これを尊徳性の学と称し、これと相対的に現在言う所の実在を求める学問、知識があり、これを道問学と称するが、両者はあいおぎないあって空疏に流れないようになっているとのべ、清代の思想はこれを継承したものであるという。従って清代の思想は理学と考証学を分けて考えるのでなく一体として把握すべきであるとし、清初の朱熹の理学は顧炎武を開祖とする浙西学派に、陸象山、王陽明の心学は浙東

学派に継承されたという。それから更に清代思想は、経学と史学に分流したが、この尊徳性、道問学という基本精神は受けつがれており、これが清代中期、戴震、章学誠の学を生んだとみるのである。[21] 余氏には更に中西歴史哲学を比較した大作「章實齋與柯靈烏的歴史思想」「一個人文主義的歴史観」がある。氏によればコリンウッドは近代英国の代表的な歴史哲学者であり、その著作「歴史の観念」は歴史哲学研究の必須の文献であるという。また彼の思想は人文主義的歴史観と称されるものであるが、それは人の思想を中心課題としているからであるという。更に彼は人の行動とは事の外在と内在両面を合一したものといったが、この点章学誠の言う事の合一という思想と一致しているという。

次に清代史に関しては早くからジョナサン・スペンスの一連の研究がみられた。スペンスはイギリス生れ、ケンブリッジ卒業後、イェールに学びアーサ・ライトの弟子になり、現在はイェール大学の教授である。氏の研究は一九六六年刊行の『曹寅と康熙帝』から始まる。この著の中で氏は康熙帝の包衣であった曹寅について研究し、特に曹寅が織造委員となって内務府財政を処理するのに貢献すると共に江南漢人の動向を探る情報機関としての役割を担っていた点について叙述した。[22]

氏は続いて一九六七年夏から六八年の春にかけて明末から現代までの十六人の西洋人顧問のことを書き六九年刊行したが、その著作は一九七五年三石善彦氏によって翻訳された。[23] 本書の日本語版への序文によると本書を書きあげた時期は中国における文化大革命のさなかであり、またアメリカのベトナム戦争への介入が始まった頃であり、著者はこの書を研究しながらベトナムにいるアメリカ人顧問のこと、更には文化大革命の際の攻撃的な言辞の対外政策とも比較しないわけにはいかなかったという。これは文革及びベトナム戦争の最中に叙述された関係上、このような見方になったと思われるが、本著が提示した研究課題は中国と西欧との異文化交流の実態にきりこんだものとして興味深いものとなった。氏はこれに続いて一九七九年刊行の論文集『明から清へ』をまとめ明末から清の最盛期に至る時期に内的一貫性があることを強調した。それを思想史の面でみると明末の東林党の人士の思想は王夫之に至る清初の学者に貫いてみられることをあげた。その一方では明にかわって成立した清の対外政策は一貫して海岸線ではなく内陸部の辺境を志向していたというものである。[24] ところでスペンス同様日本に於い

てまず明末清初の思想を連続したものとして把握したのは溝口雄三氏であり筆者もまた政治思想（経世思想）の連続性について叙述した。[25] 筆者はもともと清朝雍正朝が宋以降の独裁君主体制が最も完備した時期ととらへ考察していたが、その頃出版された黄培の『雍正期の研究』に注目し書評した。[26] 黄培はこの著の中で雍正独裁政治の研究こそ中国独裁政治の実態を明らかにできる好個の時代であるとのべたが、この指摘は筆者と軌を一にするものであった。また前述したスペンスも一九七四年『中国の皇帝—康熙の自画像』を出版したが、これは康熙の人物像に焦点をあててその独裁者としての心理分析を行ったものである。また同じ頃楊啓樵氏が雍正帝の研究を始めその皇位継承問題に焦点をあてて雍正の帝位簒奪説を批判した。[27]

ところで筆者の関心はこの独裁政治が最頂点に達した清朝雍正朝が乾隆の安定期をへて嘉慶・道光頃から下降線を辿りやがて崩壊していく過程を追求すること、特にアヘン戦争以降の欧米の進出が清末の政治改革にどのような影響を与えたかということ、それと共に明末清初から雍正に至る政治過程の変遷を明らかにして清代政治史、政治思想史を概観することを研究課題にしたのであるが、この意図したことを達成するためにも日本・中国のみならず欧米の学界での研究状況を調査・検討する必要に迫られたのである。筆者の関心がこのような方向にあった時、再びスペンスの著作である一九七八年刊行になる『ある農婦の死』の翻訳本を知ったのである。[28]

この著は康熙帝治下の山東省郯城とよばれ地域を舞台として自作農・小作人とその妻たちの日常生活の中にみられる生と死を創作風に叙述したものであるが、著者は資料として馮可参主編の「郯城県志」黄六鴻著「福恵全書」それに蒲松齢著「聊斎志異」を使用してこれらを見事に組み合わせて興味深い物語となっている。特に名もしれない地方の女性を主人公にした点は注目すべきであり、其後の中国史研究におけるジェンダー論の先がけをなすものとなった。[29] また同時に民衆の生活に焦点をあてた研究はそれまでの支配階層中心の歴史学から大きな転換をなしたものといえよう。民衆の立場にたった研究となると日本にも一時期農民運動に関するものが盛んであったが、これら研究が支配層に対する抵抗に主眼があったのに対し、氏の民衆観には現実と幻想の中にさまよう農民の運命をときあかすことに力点があったようである。これはともかく氏の研究にあっては、地域史、地

方史そして基層社会の実態解明に向いており、これは当時コーエンが提唱した内発的要因を重視する研究に答えるものとなっていた。

ところで一九八〇年代今一つ注目される研究がジョシュア・A・フォーゲルによって進められていた。それは内藤湖南の研究であり、一九八九年井上裕正氏によって翻訳された『内藤湖南—ポリティックスとシノロジー』である。[30] ここで訳者は中国史の内在的理解を重視するコーエンなどの欧米の研究者はとくに湖南に強い関心を示すに違いないと指摘する。また近代日本の政治思想史に関する研究の上からもアメリカ学界で高い評価をえているとのべている点にも留意したい。このことは現に湖南の宋代近世説を本著から学んだフェアバンクがそれを晩年の著作にとりいれていることで明らかである。[31] 湖南の基層社会の面からみても宋代に生成したものが清末から民国にかけても持続しているという研究は、まさに中国史において内在的要素を重視する見解と一致している。日本の近代政治思想史の研究の面からいっても幕末から明治年代、更に大正をへて昭和の太平洋戦争敗北に至る知識人の思想を検討する際にも湖南は好個の材料となっている。

以上筆者は戦後のアメリカ学界の研究動向について自らの研究史の係りと関連させてのべてきた。アメリカの研究はその時々において貴重な示唆を受けたものもあるが、どちらかといえば巨離をおいて考えることもあった。しかし最近になって研究の相互交流は絶対必要であると思うようになった。これは何といっても筆者がフェアバンク晩年の大作である『中国』を翻訳してからである。筆者はこの著作を通して歴史研究の面白さを知り、歴史研究がもっとグローバルになることを願うようになったのである。

注

(1) 拙著『清代政治思想と阿片戦争』第二章　阿片戦争期の経世思想家　第一節　阿片戦争研究の視点　参照（同朋舎出版　一九九五年二月）

(2) P・A・コーエン著　佐藤慎一訳『知の帝国主義』序章　第一章「西洋の衝撃—中国の反応」にまつわる問題　参照　（平凡社　一九八八年六月）。原名は Discovering History in China (Columbia University Press 1984) by Paul A. Cohen.

(3) 拙著（1）の著　第二章　第一節　参照

(4) 拙著（1）の著　第二章　第三節　包世臣の経世思想　第四節　魏源の経世思想　参照

(5) 坂野正高「J・K・フェアバンク著　中国沿岸における貿易と外交」書評（『アジア研究』一巻二号　一九五四年十月）

(6) 坂野正高著『近代中国外交史研究』（岩波書店　一九七〇年）。

拙評「東洋史研究」第二九巻第一号　一九七〇年六月

(7) J・K・フェアバンク著　平野健一郎　蒲地典子訳『中国回想録』（みすず書房　一九九四年七月）第六部参照。原名は China Bound–A Fifty–Year Memoir Harper & Row, Publishers, 1982. by John King Fairbank.

(8) J・K・フェアバンク著　市古宙三訳『中国—アメリカと中国』上下（東京大学出版会　一九七二年九月）参照。原名は The United States and China, Harvard University Press 1971.

(9) 注（7）の著　第六部　参照

(10) 注（8）の著　あとがき　参照

(11) ベンジャミン・I・シュウォルツ著　平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋』（東京大学出版会　一九七八年）。原名は In Search of Wealth and Power Yen Fu and the West Harvard University Press 1964. by Benjamin I. Schwarts.

(12) 注（11）の著　第一章　背景と枠組　参照

(13) J・K・フェアバンク著　大谷敏夫・太田秀夫訳『中国の歴史—古代から現代まで』（ミネルヴァ書房　一九九六年七月）。原名は CHINA : A New History by J. K. Fairbank (Harvard University Press 1992). 第十三章　中国人市民社会の探求　参照

(14) フィリップ・A・キューン著『後期中華帝国における反乱とその敵—軍事化と社会構造』一七九六—一八六四（ハーバード大学出版　一九七〇）。原名は Rebellion and Its Enemies in Late Imperial China–Militarization and Social Structure, 1796–1864 (Harvard University Press, 1970, by Philip A. Kuhn).

拙評「東洋史研究」第二九巻第四号　一九七一年三月

(15) 河地重造「アヘン戦争以後のウェスタン・インパクトと中国の農村経済体制」（『アジア研究』十四巻三号　一九七六年）

(16) G・W・スキナー著　今井清一・中村哲夫・原田良雄訳『中国農村の市場・社会構造』（法律文化社　一九七九年）。原名は Marketing and Social Structure in Rural China. by G. William Skinner (Association for Asian Studies, Inc. 1973)

(17) マーク・エルヴィン著『旧中国のパターン』（ロンドン　スタンフォード大学出版　一九七三年）。原名は The Pattern of the Chinese Past, by Mark Elvin (London Stanford University Press 1973).

拙評「史林」第五七巻第一号　一九七四年一月

(18) イェール大学での中国研究については、河田悌一「アメリカの中国研究—イェールの場合」（創文　一九八一年十月）に詳細に叙述されている。

(19) 余英時著『歴史與思想』（台北　聯經出版事業公司

一九七七年九月）所収

(20) 余英時著『中国近世の宗教倫理と商人精神』森紀子訳（平凡社　一九九一年四月）。原書は『中国近世宗教倫理與商人精神』（台北　聯經出版事業公司　一九八七年四月）。

ところで一九八六年五月に記された著者の自序で中国に何故資本主義が出現しなかったというウェーバーの問いに返答しなければならないとしたならば、その原因は中国に「世俗内的禁欲」の倫理が欠乏していたからではなく、中国の政治と法律がまだ「合理化の過程」を経ていなかったからだということができるかもしれないと記している。この余氏の問題提起に対する溝口雄三氏の批判、それに対する島田虔次氏の見解、また溝口氏とは違った角度から余氏の視点も西洋近代モデルであり、これを支配ないし批判的に対象化しなければ中国史の内面的理解は望めないと指摘した岸本氏の批判等については、注（1）の拙著　第二章　第一節を参照されたし。但し余氏の指摘にある中国の政治と法律がまだ「合理化の過程」を経ていないという点については筆者も同感であり、その点の解明が望まれる。

(21) 注（19）の著所収の論文「清代思想史的一個新解釈」参照。

この「内在理路」説に対しては、注（20）の著の跋文で島田虔次氏があまり説得的でないように思われる。私には「清朝の弾圧」説がもっとも合理的解釈のように思えると批判的である。また訳者あとがきで森紀子氏はこの「内在超越」説は、ウェーバーの儒教観を克服するためのキーワードとして注目に値すると思うと述べている。ここにみえているように「内在理路」説はあくまで仮定として提起されたものであり、今後の検討課題となっている。

(22) ジョナサン・スペンス『曹寅と康熙帝』　原書は、Tsáo Yin〔曹寅〕and Kang-hsi Emperor〔康熙帝〕: Bondservant and Master (Yale U.P. 1966). by Jonathan D. Spence. この著については拙著『清代政治思想史研究』（汲古書院　一九九一年二月）。第一部　第二章　三　曹寅と織造局　参照

(23) ジョナサン・スペンス　三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』（講談会　一九七五年九月）。原書は To Change China, Western Advisers in China 1620－1960 (Little, Brown and Company, 1969). by Jonathan D. Spence.

(24) 注（2）の著　第四章　中国研究の新たな潮流　第三節　一八四〇年を越えて　参照

(25) 注（22）の拙著　第一部　序論　第三部　終章　参照

(26) 黄培著『独裁機構、雍正期の研究　一七二三―一七三五』原書は Autocracy at Work: A Study of the Yung-cheng Period, 1723－1735 (Indian University Press　, by Pei Huang).

(27) 拙評「史林」第五九巻第二号　一九七六年三月

楊啓樵著『雍正帝及其密摺制度研究』（香港　三聯書

店　一九八一年一月）

この問題について更に詳細な研究として『揭開雍正皇帝隠秘的面紗』（香港　商務印書館　二〇〇〇年一月）がある。

（28）J・スペンス著　山本英史訳『ある農婦の死―十七世紀　中国の現実と夢幻世界』（平凡社　一九九〇年十一月）。原書は The Death of Woman Wang, by Jonathan D. Spence (New York, The Viking Press, 1978)

（29）P・S・ロップ著「帝制後期の中国の女性たち」（『中国―社会と文化』第十三号　中国社会文化学会　一九九八年六月）

この論文の結びにジョナサン・スペンスの『近代中国の探求』（一九九〇年刊）を例外として今まで女性学やジェンダー問題の研究を一般的な中国史の論述の中へ組み入れようとする試みは、ほとんどなかったと記している。

（30）ジョシュア・A・フォーゲル　井上裕正訳『内藤湖南―ポリティックスとシノロジー』（平凡社　一九八九年六月）。原書は Politics and Sinology, The Case of Naitō Konan 1866-1934, by Joshua A. Fogel

この著についての筆者の私見は、「内藤史学における中国文化的アイデンティティ」『他文化を受容するアジア』所収（二〇〇〇年三月　和泉書院）を参照されたし。

（31）注（13）の拙著　第五章「宋代の解釈」にフェアバンクはフォーゲルの著を読み、内藤湖南を知り、それを氏の宋代研究に適用したとある。